

『源氏物語』と漢文学

【開催趣旨】

『源氏物語』の成立に漢文学が深く関わっていること、実際『源氏物語』には多くの漢詩文が引用されていることは、現在広く知られるようになってきている。引用される漢詩句がどのような効果をもたらしているかについての研究も、蓄積されてきた。しかし、個別的な引用や典拠の問題でなく、『源氏物語』ひいては平安朝文学の基盤としての漢文学の問題については、いまだ十分に議論がなされてはいない。

それには理由がある。たとえば思想基盤としての漢文学、というとき、平安時代大学寮を中心的な場として共有された「儒教（古代儒教）」がまず想起されようが、思想史研究の領域では平安時代の儒教を具体的かつ総括的に捉える研究が十分に展開されておらず、その特質がいまだ明らかでないということが大きい。儒教は、古代天皇制国家に政事理念、理想とする社会秩序のイメージを提供するものとして、文化や国制と密接に関わりつつ平安時代独自に展開したはずだが、日本儒学史は多く江戸時代を中心に書かれ、伝来から平安末までの儒学は簡略に説明されてきたというのが現状ではないだろうか。

『源氏物語』に即していえば、物語中の光源氏や男たちの政治的言説に、鎌倉時代に成立した注釈書『光源氏物語抄』は『臣軌』『古文孝経』といった漢籍を引用する。これらは平安・鎌倉時代を通して読まれ続けたいわゆる逸存書（＝中国では失われたが日本に伝存する漢籍）で、『臣軌』は唐代武則天の頃に編纂され『旧唐書』経籍志には儒家類に分類されるが、三国時代・杜恕『体論』の君臣同体論を基軸にしているという。『古文孝経』については孔安国伝の半分が『管子』の引用であり、しかも形勢篇に集中して道家に合致する「順」の思想と結びつけられていることが指摘される。また同じく平安時代によく読まれた皇侃『論語義疏』も、魏晋の玄学の影響を受け道家思想によって経文を解釈する場合があるという。中国思想史上、唐代は漢代と宋代とに挟まれた儒教的には谷間の時代とされて、仏教と道教が浸透する時代、三教鼎立の時代と説明されることが多いが、道家の混合する唐代儒教、さらにそれを取捨選択して日本の学問として定着した平安儒学を、どう評価し、平安朝文学の理解へと繋げてゆくか。『源氏物語』と漢文学」をテーマとする今回のシンポジウムでは、平安朝の文化・文学の根底にある思想的な枠組み、学問的枠組みを考えてみたい。

シンポジウムは第一部と第二部に分かち、第一部の基調講演では、唐文化・唐代学知を受容しつつ創出された平安朝文学の世界について、考える視座を提供していただく。第二部は共同討議の場とし、ここでは周公旦摂政の故事を議論の切り口とする。『源氏物語』の中で光源氏は理想的な政治家として周公旦に重ねられ、古注釈書も『尚書』や『史記』の周公旦の記事を挙げる。平安時代の表などの文でも、藤原良房以来摂政といえれば必ず周公旦と結びつけられて、摂政の典拠、摂政という体制の正当性を保証する根拠とされる。しかしこの周公旦摂政については、中国思想史においては、北宋以降君臣の別を重視する考えから否定的な解釈がされるようになる、といわれるところである。日本で近世以降、天皇親政を理想とし摂関政治をそこから外れたものとみる政治観が固定するのも、周公摂政をめぐる議論に象徴される、君臣間秩序の厳守という新儒教の理念と呼応している。

源高明『西宮記』（臨時六 凡奉公之輩可設備文書 一、政理事）には「群書治要、五十卷、貞観政要、十卷、已上唐書、但君臣之間事、尽此書也」とあり、平安時代において『群書治要』や『貞観政要』（こそは「君臣の事」を学ぶ重要な典籍とされた。第一部とのつながりでいえば、『群書治要』『貞観政要』『臣軌』はまさに唐文化・唐代学知の結晶ともいうべき書物であり、平安朝文学はその上に成立した。大陸では貴族社会が消滅した宋代以降、新たに政治を担うようになった士大夫たちによって従来の儒教がアップデートされて宋代新儒教が展開してゆき、その過程で、唐代に創られ平安貴族が重視した書物は多く失われるが、鎌倉時代注釈者が『源氏物語』世界との繋がりをみていたそれらの書物の世界―唐代学知・思想―とは、はたしてどのようなものだったのか。

近年の日本史学では、天皇親政と摂関政治は対立的に捉えるべきものでなく、摂関制はむしろ天皇制を補完するものとして展開したという理解が通説となっている。これら日本史学や中国思想史の成果を踏まえながら、改めて平安時代における認識の枠組み、平安時代儒教の特質を問い、『源氏物語』の理想の政治像・政治家像を検討する。以上の第一部と第二部の内容を通して、『源氏物語』の基盤にある漢文学、学知について理解を深めることを目指したい。

（文責：長瀬由美）

【シンポジウム「源氏物語と漢文学」スケジュール】

- 13:30-13:40 会場校からのご挨拶（柳澤明先生）・会場説明
13:40-13:50 趣意説明・講師紹介…長瀬由美（都留文科大学）
13:50-14:50 第一部 基調講演 …渡辺秀夫氏（信州大学名誉教授）
「唐文化の受容と国風の創出―王朝文学の漢文世界」
14:50-15:05 休憩
15:05-17:10 第二部 共同討議「光源氏と周公旦」各およそ20分での報告のあと、討議。
15:05-15:25 報告①袴田光康氏（日本文学・日本大学）
15:25-15:45 報告②陳佑真氏（中国哲学・都留文科大学）
15:45-16:05 報告③小塩慶氏（日本史学・東京大学史料編纂所）
16:05-16:25 休憩・質問記入
16:25-17:10 全体討論

【講師・報告者紹介】

渡辺秀夫氏 信州大学名誉教授。早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得。文学博士（早稲田大学）。著書に『平安朝文学と漢文世界』（一九九一年、勉誠社）、『詩歌の森 日本語のイメージ』（一九九五年、大修館書店）、『和歌の詩学 平安朝文学と漢文世界』（二〇一四年、勉誠出版）、『かくや姫と浦島 物語文学の誕生と神仙ワールド』（二〇一八年、塙選書）。論文に「唐文化の受容と国風文化の創出―唐伝来の賦格『賦譜』からみた平安朝漢詩《句題詩》の生成―」（『万葉集研究』41、二〇二二年）他多数。

袴田光康氏 日本大学教授。明治大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得。博士（文学）。著書に『源氏物語の史的回路 ―皇統回帰の物語と宇多天皇の時代―』（二〇〇九年、おうふう）。

陳佑真氏 都留文科大学講師。京都大学大学院文学研究科中国哲学史専修博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。著書に『三蘇蜀学の研究 ―北宋士大夫による儒家經典解釈の展開―』（二〇二四年、京都大学学術出版会）。

小塩慶氏 東京大学史料編纂所助教。京都大学大学院文学研究科日本史学専修博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。論文に「国風文化」はいかに論じられてきたか」（『撰関・院政期研究を読みなおす』二〇二三年、思文閣出版）、「平安中後期の祥瑞」（『日本史研究』728号、二〇二三年四月）、「九世紀前半における医療の転換―『続日本後紀』嘉祥三年三月癸卯条再考」（『日本歴史』861号、二〇二〇年二月）など。